
消えた名探偵

千景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた名探偵

【Nコード】

N4070F

【作者名】

千景

【あらすじ】

入院生活をよぎなくされたコナン。苦痛と痛みに耐える毎日。そんな中、目暮と小五郎がコナンの両親の行方を探し始めた。しかし、江戸川コナンという人物は存在しない事を知ってしまった二人。いよいよ追いつめられたコナンは思わず二人の前から逃げ出してしまったが…

プロローグ（前書き）

おまたせしました。名探偵シリーズ再開です。頻繁に更新するのは難しいかもしれませんが、地道に書いていきたいと思えます。見捨てず読んでくれたらうれしいです。

それでは、追いつめられた名探偵続きの始まりです。

プロローグ

新一は走る。

(どこまで…)

遠くで自分の名を呼ぶ声が聞こえた。
それでも新一は走ることをやめなかった。

(どこまでいけば…)

- ハアハアハア -

新一はすでに息を切らしていた。まだほんの少ししか走っていないというのに。

(思ったより体力が落ちている)

二か月の入院生活は新一の体力を低下させるには十分な時間だった。

たまらず新一は人目のつかないよう、階段下の物陰に身を潜めた。

- ハアハアハア -

肩で息をしながら、地べたに座り込み少しずつ呼吸をととのえていく。

(……思わず……逃げちゃった……)

- ハアハア -

(これから……どうする……)

- ハア -

(……ばかだな)

新一は幸島と対峙したときの事を思い出していた。

『頑張れ！幸島！頑張れよ！』

あの時……口にする事はなかったがずっと心の中で叫んでいた言葉
……。

『頑張れ』

(あれは……俺自身に言った言葉だ)

新一は自嘲気味に笑みをこぼした。

(ほんと……ばかだよな)

新一はひざをかかえ、……そして静かに瞳を閉じた。

第1話

新一が消えた窓の真下は、丁度一病棟と二病棟をつなぐ連絡通路となっていた。

屋根があり、そこをめがけて飛び降りたのだ新一は。

相変わらず身軽な奴だ。窓の外を覗きこんだ時には既にその姿は見えなくなっていた。

「あいつ……っ」

平次はうなつた。

「毛利君！一体どうしたというんだ急にっ……っ！」

目暮は声を荒立てた。

「らしくないぞ！子供を追いつめるようなまねをして……っ！
どういうつもりだ。詰め寄られ小五郎は思わず口ごもる。

「私は……ただ……っ」

（あいつが……潮時だと、口にしたから。まるで、何かをあきらめるような……そんな物言いをしたから……だからっ……）

……不安に感じたんだ……

「……もういいっ……とにかくコナン君を追っぞ！早く見つけて、病室に戻さないとっ……っ……いつ発作が起こるかわからんのだろ！？行くぞ！」

「は、はい！」

慌てて二人は病室を後にした。それを見た平次は、おもむろに窓枠に足をかけた。

「ったく……世話の焼けるやつちゃ」

そう言い、平次は勢いよく窓から飛び出したのだった。

時間にして、そんなに経っていないと思う。

一瞬、意識が途切れていたことに気づき、新一はハツとなった。

(寝ちまつてた…？薬がまだ効いてんのかな…)

新一は溜息をついた。

いろいろ考えなければならぬ事があるのに、体がついていかな
い。

逃げて、こんな状況に陥おちいているというのに、眠おちってしまうな
んで、余裕なのか、そうじゃないのかわかりやしない。

新一は、膝を抱えたまま顔を上げる事すらできないでいた。

追いつめられれば追いつめられる程、何をするのも億劫になるの
は何故なのだろうか。

(フフ)

自分はこんな性格だったか…？

後先考えず、逃げて、行き場を失って、こんなところに隠れてい
る。

こんなバカな事をする人間だったか…？

フ、フフツ……

可笑しくもないのに笑いが込み上げて仕方がなかった。

どうしようもなくなると笑いたくなるのだ人間は。新一はその事
に初めて気が付いた。

「工藤！！見つけたで！」

声に肩を揺らす、

(服部…)

いつもいつも突然に現れる。こんなふうになを呼ばれるのは何度
目だろう。

「……なんでここが」

「探偵の事は探偵が一番わかっとなるっちゆうこっちや。あの状況で

隠れるんなら、ここやと思ったんや」

と言うのはもちろん嘘で、偶然ここにたどり着いたのだったが。確かにここなら人通りから死角になって、誰にも見つからなさそうだ。

「……そうか」

平次が現れても、新一は顔を上げようとはしなかった。

顔をふせたままぼそりと答えた。

「だから、その姿で泣いても、かわいいだけやっていってるやろ？」

「……ばーか。泣いてねえよ」

「……したら、顔を上げて……もの言えっ」

平次は手を伸ばし、新一の頬を両手で掴んだ。そして半ば強引にその顔を上げさせる。

「人と話をする時はなあ、こうやって、目と目を合わせて言うもんやっ」

平次の行動に新一は目を白黒させた。

「そ・れ・にっ」

顔を掴んだその手で両頬をつねる。

「いつ、痛ひゃい」

「ばかはお前の方やっ。窓から飛び降りるマネなんてしやがって。

無茶ばかりしよってからに！このあほっ」

そう言いながら、頬を左右にひっぱった。

「はっほり！痛ひゃい！」

「おーおー、子供のほっぺたはよお伸びるなあっ」

「痛ひゃいっ！」

すっかり、涙目になった新一を見て気がすんだのか、平次はようやく、その手を離れた。

「……っ」

手が離れてもなお、ヒリヒリと痛かった。新一が頬をさすっていると、その横に平次はドカリと座り込んだ。

「……………で？」

「……………？」

「お前、これからどうするつもりや」

「……………」

平次の問いに答えず、新一は黙って頬をさすり続ける。

「あてはあるんか」

「……………」

「……………阿笠博士んとことかか？」

「……………」

無言だった。一向に反応を示さない新一を見て、平次はおもむろに、その小さな体にもたれかかった。

「……………」

突然、体重をかけられて新一は驚いた。

押し付けられる背中を押し返えしてはみるものの、平次は体の力を抜き、完全に体重をのせてくる。

子供の力じゃ、とてもじゃないが、たちうちができなかった。

新一はたまらず、声をあげた。

「重いつ！一体何がしたいんだお前はっ」

「……………ちゃんと声、でるやないか」

そう言つと平次は体を起こし、新一を見てニヤリと笑った。

「服部……………」

「で、どうする。行くところなかったら、しばらく俺ん家来るか？」

「……………っ」

「子供一人くらい増えたつて、なんともないで、家は……………」

この状況で小五郎の元に帰るわけにはいかない。だからといって、行けるはずもなかった。

服部にも阿笠博士にも頼るわけにはいかない。匿われても、自分はずぐに見つかつてしまうことだろう。

新一は無言で首をふる。

「……………せやな、俺ん家とか、博士ん家にも一発で見つかつてしま

うわなあ……っと、工藤」

「なっ」

急に腕を掴まれ引き寄せられた。

片手で脇を抱えられ、そのまま張り付くように、壁際に身を寄せ
る。

「な、何すんだ!」

「しっ。静かにせえ。見てみい、工藤。おっさん来たで」

顎で方向を示す。見ると、小五郎の姿があった。

辺りを見回し、コナンを探しているようだ。

新一は両手で口をふさぎ、思わず息を呑む。

「目暮警部はいないようやな。な?言つたやろ?探偵の事は探偵が
わかってるってな」

そうなのか?と思いつつも、新一は返事をする事ができなかった。

(どうしよう…!)

「さて、っと。んじゃ行くか。工藤」

(えっ…)

「いつまでもここにいても、しゃあないやろ。身の振り方考えるに
しても、場所変えなな」

平次は新一を小脇に抱えたまま立ち上がる。

どこへ行くというのだ。抱えられたままの状態で見上げていると
平次は言った。

「言つとくけど、優しく背負ってもらえると思つなよ。ま、今は裸
足やから運んでやるけどな」

お前担いで逃げんの何回目やと思つてんねん。

そう言つと、平次はその場を後にしたのだった。

第2話

「なあ、なに怒ってんねん」

「怒ってない」

「嘘つけ。さつきからずつとふてくされてるやないか」

「ふてくされてない」

病院から場所を移してからずつとこの調子だった。これでもまだましになった方だろうか。

最初のうちは二人の間に会話すらなかった。それというのも、この場所に近づくとつれ、新一の態度があきらかに不機嫌になっていたからだ。

声をかけるにかけられない状態に陥り、沈黙が続く。そして先にこの状況に耐えられなくなったのは、いつもの如く平次の方だった。しかし、話しかけても返事はない。不機嫌の理由を問うても怒っていないの一点張りで会話にならない。しまいには平次の方もケンカごしになるしまつだった。

「どうみても怒つとるやないか。理由を言え、理由を！子供か！？お前はっ！」

平次が少し声を荒立てると、新一は口をつぐみ、じろりと平次を睨みつけた。

「……なんやねんっ」

「……どうせ俺は子供（の姿）だよ」

「なんやて！？聞こえませんかどーっ！」

「……っ」

まるで、本当の兄弟ゲンカだ。差し詰め平次が兄、新一コナンが弟といったところか。

このままでは埒があかないとそう思った新一はしぶしぶ口を開い

た。

「……どこに連れて行くのかと思えば……」

「何？」

ボソボソと言うので聞き取りにくい。平次は身を乗り出し、耳をそばだてた。

「どこに連れて行くのかと思えば、俺ん家じゃねーかよっ」

「はっ？何や、お前ここが気に入らんかっただけか」

そう、今いるこの場所は新一の部屋だった。

平次が促がし連れて来た場所は結局は新一の家だったのだ。

新一はベッドに腰掛け、平次は向いの椅子に座っている。

「何を怒ってるんかと思つたら、しょーもない理由やな」

「……隣は博士の家だ。ここにいたらすぐに見つかつちまうよ」

「心配せんでも大丈夫やつて。前ん時だつて、見つからんかたし、灯台もと暗しつちゆうやる」

「前と今回じゃ状況が違うし、それに前ん時だつて灰原に見つかつたじゃねえかよっ」

「そーやつたけ？」

「そーだよっ！」

「しゃーないやん。他に行くとこなんか思いつかんかったんやし。見つかった時はそんな時はそんな時や。ま、こまかい事にすんなや」

「……」

一人で怒っていた自分が馬鹿みたいだ。平次のあつけらんとした物言いに、気が抜けてしまい、新一はどつと疲れを覚えた。

こうして、ベッドの端に座っているだけで、ひどく体がだるかった。精神的にだけでなく、本当に体も疲労しているのだろう。

「……もういい。疲れたから寝る」

「あ、ちようまで、足拭いてからにせえ」

ベッドに横になろうとすると、平次はどこからとりだしたのか、濡れタオルを手にしていた。そして、おもむろに新一の足をとり、拭いだす。

「さつき、病院の中裸足で走りまわってたやる？みてみ、タオル真つ黒やで」

（家に着いた時、少しの間姿を見せなかったのは、これを用意していたのか）

まったく、気がきくのかきかないのか、良く分からない男だ。

「……もういい」

「よくあるか。キレイにしとかんと汚れるやろ」

「もういいったら。服部、もういいから」

放っておいたら指の間まで拭かれそうだ。新一は平次の手を押し
のけ、ふとんを頭からかぶり、横になった。

「なんや、ホンマに疲れとるんか？」

「そう、だな……」

（いろいろと…疲れたよ。…本当に、いろいろと…）

新一は深く息を吐き、そして、静かに瞳を閉じた。

第3話

目が覚めるとそこには平次の姿はなかった。
それに気付いた瞬間、心臓がひときわ大きな音をたてた。

「服部？」

名を呼んでみるも返事はない。

目の前の机には読みかけの文庫本がうつ伏せに置かれていた。

「服部……」

あたりを見回すが、やはり平次の姿はなかった。

「……」

新一は無意識に己の胸元を握りしめる。

なぜか心臓が早鐘を打っていた。

時計は午後一時をさしている。

部屋についてから、まだ一時間程しかたっていないようだ。

「……」

新一はゆっくりと体を起こす。一筋の汗が頬をつたい、流れ落ちた。

何なのだろう。このいいようなない感情は。

今までに感じた事のない、不安感に新一は戸惑いを覚えた。

静まり返った部屋。

己の心臓の音が聞こえてきそうだ。

(…誰もいない…)

いつも誰かが傍にいた。それが当たり前だった。
父さんや母さん。

コナンの姿になってからは、蘭や小五郎が……博士、灰原、……学
校では子供たちが……。

入院してからも、いつも誰かがいてくれた……。

だけど

……今は一人きりだ……

(ああ……そうか……)

新一は気づいてしまった。

(これが……孤独感というものか……)

「……っ、ゴホツゴホツ、ゲホゲホゲホツ!!」

今感じている感情の意味に気づいたとたん、咳がこみあげ、我慢
できずに激しくむせてしまう。

「ツツコホツ……はあ」

深いため息の後、体を折り、孤独感にさいなまれた新一は、しば
らく動く事ができなかった。

……胸が押しつぶされそうだ……

誰もいない部屋に一人にされるだけでこんなにも不安を感じるだなんて思いもしなかった。

本当に自分はどうしてしまったというんだろう。

新一は硬く瞳を閉じ、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「大丈夫……大丈夫」

（大丈夫だから。……落ち着け……俺）

新一は深く息を吸いながら、心を落ち着かせることに努めた。

机の上には読みかけの文庫本。

ほんの少し席をはずしているだけだ。あいつはすぐに戻ってくるだろうし、それに。

俺は自分から一人になったんじゃないのか？

病院を抜け出したのは俺だ。

「……」

新一は目を開き、ふと、視線を上げた。

視界に入ったのは机の上の文庫本と、その横に置いてあるペン立てだった。

「……」

ベッドから下り、傍に歩み寄る。そして、ボールペンを手にした。しばらく考え込んだ新一は、おもむろに椅子を引き、近くにあったノートにペンをはしらせた。

第4話

新一が眠りについたらのを見て、平次は近くに置いてあった一冊の本を手にとった。

ページをパラパラとめくってみると、中身は推理小説のようだった。

時間つぶしにはなるかと、椅子に座り読み始めたのだが、ふと平次は気がついた。

しばらくの間、人の住んでいなかったこの家に、食料はあるのだろうか？と。

こいつには今、考える時間が必要だ。

2、3日でも、うまくここに身を潜める事ができたとしても、肝心の食料がなければ話にならない。

「……………」

平次は読みかけの文庫本を置き、新一の顔を覗き込んだ。

今は体調は落ち着いているようだ。新一は静かな寝息をたてている。

「じゃあない、ちよう、行ってくるか」

近くにコンビニがあったはずだ。新一を起こさないように平次はそつと、部屋を後にした。

コンビニ着き、まずは1.5リットルのペットボトルを2本、カゴへ入れた。

2、3日分とは思っているのだが、いまいちどれぐらいの量を買えばいいのかわからなかった。

少ないよりか、多い方がましだろうと、とりあえず目についた食

料を手当たり次第にカゴへ放り込む。

（一応、病人食も買つといた方がええんか？病人と言えば、雑炊にお粥……お粥といったら、うめぼしか！……うめぼし、うめぼし……あ、これ新商品や。これも買つとこ。お、俺の好きなやつちゃ。これも買つとこか。……と、これもうまそうやなあ）

すでに、カゴの中はいっぱいだ。

食料の選び方が次第にわけのわからない事になっているが、平次は全く気付いていなかった。

店内を物色していると、ふいに携帯電話が鳴りだした。

「（よし、これも買おう）…もしもし？」

「あんた！今、どこにおるん！？」

「な、なんや、和葉やないか。でかい声だすなやつ。何やねん」

電話は和葉からだった。あまりの大きな声に平次は一瞬怯んでしまった。

「何やねんちゃうわー！急にいなくなつてもうてっ、どこにおるんよっ！」

「どこつて……コンビニやけど」

「コンビニつて…あんた、まさかコナン君と一緒にいるんとちゃうやろっね！？」

「！」

和葉の存在をすっかり忘れていた平次は、内心焦りを覚えながらも、なんとか平静を保つ。

「……お、おらんけど。どないしたんや」

「本当に、知らんの？」

「だから、なんやねん」

「今こっちは大変なんよ！コナン君、病院から抜け出してしもうたらしくて……あたしも、さつき毛利のおっちゃんから話聞いたばかりで、よう状況が飲み込めてへんねんけど……蘭ちゃんは話聞いたとたんにすごい勢いで病院から飛び出して行ってしまうし、とにかく、コナン君いつ発作が起こるかかわからへんから、早く探し出さん

とダメやてっ……………」

「そうか…で、おっちゃんは？」

「目暮警部と手分けしてさがすって…病人やし、子供の足でそう遠くまでいけへんやろっからって」

「……………」

「あたしも、コナン君さがし手伝うから、平次、あんたもコナン君さがしたってや」

「わかった。俺も心当たりさがしてみるわ」

「うん。もし見つけたら携帯に連絡ちょうだいや？」

「ああ。ほな、また後でな、和葉」

まさか、コナンが近くにいるとは言えるはずもなく、携帯を切る。
「……………」

なんだか、嫌な予感がした。まだ警察自体は動いてはいないようだが、蘭の行動がきになって仕方がなかった。

(これは、思ったよりも早くあいつの居場所がばれてしまいそうやな……………)

早く戻ろっ。

平次は急いで会計を済ますと、コンビニを飛び出したのだった。

第5話

『迎えに来てくれたので、パパ、ママのところへ戻ります。おじさん、蘭姉ちゃん、僕はもう大丈夫です。だから、心配しないでください。今までありがとうございます。また、後日あらためて挨拶に行こうかと思います。急にいなくなってしまうって、ごめんなさい。さようなら。』

『コナン』

書き終えたノートを片手に、新一はベッドに寝転がった。

なんとなく思い立ち、手紙を書いてはみたものの、こんなものであの二人が納得してくれるとは到底思えなかった。

(病院から抜け出しておきながら、両親が迎えに来ただって?…そんなわけがあるかよ……)

自分の書いた文章を読み返し、新一は苦笑する。

(こんな短い手紙でさよならを告げるのか?こんなもので納得しろって?…俺だったら…納得、しねえよなあ、やっぱ)

我ながら馬鹿みたいだ。

軽く自己嫌悪に陥り、新一は持っていたノートで自分の顔を覆った。

「服部…遅いな」

「あきれた、本当にいた」

「!!!」

突然の声に驚き、新一は勢いよく起き上がった。

思わず口にしてしまった言葉を聞かれたかと、口元に手をやる。

「灰、原!？」

「何故ここにいるのか？って顔ね。でも、驚く事じゃないわ。あなたが病院から抜け出したってという電話が、博士の家にかかってくるのは当然の事じゃない？」

灰原はパジャマ姿の上にガウンを羽織っていた。ドアに軽くもたれかかり、こちらを見ている。

一体いつのまにドアを開けたのだろう。相変わらず気配を消すのがうまい。

「まさかと思って来てみれば、学習能力がないのかしら。工藤君。ここへは来るなど、以前にも言ったはずよね」

まったくもって耳が痛い。しかし、素直に認めるのもなんだか癪しやくだった。

自分の意志でここへ来たのではなかったからだ。

「わかってるよ、俺だって……ッゴホ、好きでここにいるわけじゃないさ」

「……玄関の鍵も、開いたままだったわよ……。まったく不用心なんっ……！」

言葉を最後まで言い終えぬうちに、灰原は急に咳こんだ。あまりに激しく咳こむものだから、新一は不安を覚える。

「お、おい」

よく見ると顔も赤い。熱があるのだろうか。

「大丈夫か！？…、風邪、ひいてんのか？」

「ゴホッゴホッ、だ、大丈夫よ。あなたこそっ、コンッ、大丈夫なの？」

「何が？」

言いたい事は分かっていた。だけど、新一は気づかないふりをした。

灰原はそんな新一の姿を真っ直ぐに見据えながら言葉を続けた。

「……病院を抜け出して、どうするつもりなの？…何か考えがあったの事なのかしら？」

「……」

新一は答える事ができなかった。灰原の射るような視線に戸惑うばかりだ。顔を背ける事しかできない。

「ま、だいたい想像はつくけど……。おおかた、病院でじっとしているのが嫌になったか、とうとう正体がばれそうになって飛び出してきたのかのどちらかなんでしょうけど」

「う、うるせーよ」

それがせいっぱいの抵抗だった。凶星をさされ、他に言葉が見つからない。視線をまともに合わすことすらできないでいた。

「……逃げるの？」

「……！」

静かに放たれた言葉に新一は思わず、顔を上げた。

視線がぶつかる。まっすぐに向けられた瞳に、何もかも見透かされていくようで、落ち着かない気分させられた。

頭に血がのぼり、体温が上昇する。

時々、灰原はこんな表情を見せた。その度に新一はドキリとさせられるのだ。

(逃げる……)

嫌な言葉だ。

小五郎の目の前で病室から飛び出し、今まさに蘭達のそばから離れようと手紙まで書いた自分には、何の否定もできなかった。

新一は思わず、手にしていたノートをかたく握りしめた。

重い沈黙が続く。

何とも言えない緊張感。

ひたいから汗が滲みだし頬をつたい落ちた。

なんだか、息苦しい感じがした。

新一はパジャマのボタンを一つ外し、首まわりを楽にする。

「私は……ごめんだわ」

先に口を開いたのは灰原の方だった。

その視線は変わらず新一に向けられたままだが、なんだか様子がおかしかった。

「灰っ……！」

声を掛けようと口を開くが、新一は喉をつまらせてしまった。

おかしい。

少しも呼吸が楽にならない。それどころか、息苦しくなる一方だ。

(こ、これはっ……)

たまらず、新一は膝を折る。

「このまま……何もしないで、ただ待つのは嫌よ」

灰原はしぼりだすように言葉を続けた。

「ただっ、時が過ぎるのを待つだけだなんて……っ」

まっぴらごめんだわ

そう言つと灰原もまた崩れ落ちるように足元に膝をついたのだった。

呼吸はひどく乱れ、胸元を掴み、苦悶の表情を浮かべていた。

「灰原っ……お前」

新一はこの時になってようやく気がついた。

灰原がパジャマ姿の訳も、新一が入院しても一度として訪れなかった訳も……。

見舞いにも来ないで、ほんの少し薄情な奴だなと思ってしまっていた。

だけど、来なかったんじゃない。来られなかったのだ。

……いつたいつから……

はつきりとは思いだせなかった。

夏休みに入り、幸島の事件があった。そして、負傷し、入院するはめになった。

その頃にはもう、灰原の姿はなかったように思う。

……恐らくはもう、灰原の体は……。

「ここに、解毒薬があるわ」

灰原がガウンのポケットから取り出したモノは液体の入った、小さな小瓶だった。同じものが2つ握られている。

「ただし……成分未調整の、限りなく毒薬に近い代物だけど……ね」
「……!?!」

「恐らく、今、私とあなたが置かれている状態は……同じ、のハズ……。急激な体温の上昇、体中を走る激痛。その後を訪れたものは大人の姿の自分……。だけど、それも最初のうちだけだった。違う?」

「灰原……」

やはり、灰原も同じだった……こうして、会話を続けているだけでも、体力が奪われていくのが分かる。

体中が軋みはじめ、いつもの発作が起こるのは時間の問題のように思えた。

「体内に入ったアポトキシン4869は……っ、今になって、私達の体を蝕み始めた。単なる副作用の産物でしかなかった大人の姿には、もう戻ることはなく、ただあるのは痛みと苦痛だけ……」

私達にはもう、時間がない……。

灰原の手は、かすかに震えていた。

発作が起きても、ただ苦痛だけの毎日。死を身近に感じはじめ、焦りを覚え、心が折れそうになるのを必死に堪えた。

新一には灰原の心が痛いほど分かった。…認めたくはないが、自分も同じだったからだ。

「でも…っ」

「？」

「元に戻れたら？、ずっとでなくてもいい、未完成だけど、一度だけでも元の姿に戻れる事ができたら？これ以上の毒の進行を止める事はできるかもしれない…」

(進行を…止める？)

「子供の体を大人の体へと変化させていた絶大な力が、行き場をなくして、高熱と痛みを起こしているように思えるのよ…。だって、酷くなったのは、大人にならなくなっただけのもの」

確かに体の衰えは、戻らなくなっただけのように思う。

「だから…私はもう一度…、もう一度アポトキシン4869を…つくったのよ。工藤君」

「…！」

な、なんだって…？新一は耳を疑った。

「…完全にオリジナルとまではいかない、けど…ね。目には目を…毒には毒を…っていうところかしら」

苦痛で顔を歪めながらも灰原は笑って見せた。

これは、何の笑みだというのか…。

「これを飲めば、元の姿に戻るかもしれない。たとえば、戻ったとしても、死へのカウントダウンが延びるだけかも…。もしくは、今度こそ死んでしまうかもしれないわね」

『どうする？』

灰原の目はそう、語っていた。

『お前は、飲む事ができるのか?』と。

ただ、待つだけなんてできない。

俺もお前と同じだよ。灰原。

何もしないで、死が訪れるなんて、まっぴらごめんさ。

死ぬも生きるも運次第……。

新一は笑っていた。そして、灰原に向って静かに手を伸ばしてみた。

大丈夫。俺は、運はいい方なんだぜ……?

お互いに浮かべた笑みは、覚悟のそれだった。

新一は小瓶を受け取る。

そして……。

新一と灰原は解毒という、名ばかりの毒薬を飲み干したのだった。

第6話

コナンが病院からいなくなったと聞かされて、一瞬、何を言われているのか理解する事ができなかった。

小五郎が言うには病室の窓から出て行ったのだと言う。

(お父さんは、一体何を言っているんだろう……)

どうして、そんな事をする必要があるの？

病院から抜け出して、何になるというの？

何か理由があるとでも言うのだろうか？

そう思ったらいてもたってもいられなかった。

背後から和葉の呼び止める声が聞こえた。

とくに、当てがあったわけじゃない。ただじっとしている事ができなかつたのだ。

気がついた時にはもう病院を飛び出した後だった。

最初は無意識だった。

(私……どうして……)

どうして新一の家に来てしまったんだろう。

蘭は今、家のドアの前で佇んでいた。

胸の奥でくすぶっている不安。……ずっとぬぐいされないでいる疑惑。

複雑な感情を抱きながら、蘭が向かった先は新一の家だった。見慣れた風景に差し掛かった時に、ようやくその事に気がついた。

途中でそれが分かってても、蘭は足を止めなかった。いや、止まらなかったのだ。

(捜しているのは…コナン君なのに……)

何故・何故・何故

確かな理由があったわけじゃない。だけど、行かなければならぬい…そんな気がしてならなかった。

「……」

蘭はしばらく考え込んだ後、恐る恐るドアノブに手をかけた。

ドアは何の抵抗もなく開く。

(開いている……)

緊張が走った。

まさか、本当に……いるとでも言っただろうか……。

蘭は家の様子を窺った。静まりかえった家の中。だけど、なんだ
かいつもと様子が違っていた。

「……誰か、いるの……？」

そつと足を踏み入れる。玄関をあがり、奥へと進んだ。

「……コナン君？」

なんともいえない不安感が蘭の体を動かしていた。無意識に声を
出しているのもその為だった。

蘭はゆっくりと階段を上り始める。

「……コナン君……？いるの……？」

名前を呼んではみたものの、コナンからの返事はなかった。

「……」

心臓はいつしか、早鐘をうつっていた。それは、緊張してるばかり
だけではなかった。

そして、蘭は口にした。

「……し、新一……？」

聞こえるか聞こえないかの小さな声で、その名を呼んだ。

だけど、その声は静かな家の中で空しく響くばかりだった。

第7話

目の前には見知った天井。

気がついた時には、ベッドの下に仰向けに倒れていた。

一瞬、気を失っていたようだ。倒れた時の記憶がない。

飲み干した薬の効果はすぐにあらわれた。

新一と、灰原の二人は、のたうち苦しみ喘いだ。

もうダメかと思った瞬間、手足はのび、体は大人の姿へと変化を始めたのだった。

薬が効いたのだと、そう思った。

しかし、様子はいつもと違っていた。

元に戻ったかに思えた体は再び子供の姿へと縮み始めたのである。それは、当然の如く激痛を伴うものだった。

子供の姿に逆戻りし、落ち着いたかに見えた。だが、すぐさま体は変化を始める。

幾度となく繰り返される細胞の変化。急激な体温の上昇、痛み。

この苦痛が消えるのならば、いつそのことスッパリと終わらせてくれればいい。

何度そう思ったかしかない。

だが、新一は耐え抜いた。
己の姿が定着するまでに、どれだけの時間を要したのだろう。
新一は力の入りきらない手を、ふるえながら目の前にかざす。
それは大人の手だった。

(生きている……)

生きているのだ。

かざした手を強く握り、新一は喜びをかみしめた。そして、気付く。

灰原は……っ、灰原はどうなった。

周りに視線をやる。

すると新一は、ベッドの上から白い腕がだらりと垂れさがっている事に気がついた。

灰原もどうやら元の姿に戻れたようだ。

新一は思ったより衰弱しきっている体に驚きながらも、無理やり体を起こし、灰原の顔を覗き込んだ。

そして、ホッと息をつく。

(灰原も俺も、生きている……)

気を失ってはいるが、確かな呼吸を感じた。

しかし、今の状態では、灰原を抱える事もできない。

新一は阿笠博士を呼びに行こうと考えた。

立ち上がるが、意識が朦朧もうちもちとして仕方がない。

一瞬、倒れ込みそうになった。

「……っ」と

今、ここで倒れるわけにはいかなかった。

新一は、無残にも引き裂かれ、申し訳程度に体に張り付いていた服をはぎとり、クローゼットに手をかける。

ズボンをはき、Yシャツは、肩にはおるだけにとどまった。

重い足取りで、出口へと向かう。

その時だった。どこかで、自分の名を呼ぶ声が聞こえた気がした。

それは、蘭の声のように思えた。

(……まさか……な)

蘭がここへ来るわけがない。

新一はそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4070f/>

消えた名探偵

2010年10月9日14時58分発行